

社会的相互作用における回避的動機づけ及び 対人ネットワーク構造が2者関係トラブル時の ネットワーク・サポート評価に与える影響

The effect of social avoidance motivation and personal networks on
the perceived support with regard to the interpersonal conflict

山下 倫実¹⁾

Tomomi YAMASHITA

相馬 敏彦²⁾

Toshihiko SOMA

要 約

研究の目的は、最も親しい相手と対立や争いを回避したいという動機づけがある状況で、自分と相手の共通ネットワークと相手とは重ならない独自ネットワークから得られるサポートに対する評価がどのように異なるのが、ジェンダー差に着目した検討を行なうことであった。予測1は、「男性は最も親しい相手と共通の友人が多い対人ネットワークをトラブル時にサポートタイプだと評価するが、女性はしない」、予測2は「女性は独自の友人が多い対人ネットワークをサポートタイプであると評価するが、男性はしない」であった。調査対象者は大学生165名(男性58名、女性107名)であったが、2回に分けてデータを収集したため、両調査に参加していた148名(男性51名、女性97名)を分析対象者とした。予測について検討するために、対人ネットワークからのサポートに対するポジティブな評価を基準変数として、接近的動機づけを統制のうえ、性別(ダミー変数を使用:男性=1、女性=2)、対人ネットワークサイズ(共通と独自)、回避的動機づけをstep1での独立変数、2変数の交互作用項をstep2の独立変数に投入した階層的重回帰分析を行った。その結果、予測1は支持されたが、予測2は支持されなかった。親密な関係におけるトラブルを回避し、もし問題が生じた場合にも対人ネットワークのサポートを活用しながら、その問題に対処したいという期待について、ジェンダー差が存在する可能性について考察し、その理由として対人ネットワークにおける相互作用に対する捉え方や評価が異なる可能性について言及した。

¹⁾十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科

Department of Human Developmental Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University

²⁾広島大学大学院社会科学系研究科

Department of Management Studies, Graduate School of Social Sciences, Hiroshima University

キーワード: 社会的相互作用における動機づけ、共通ネットワーク、独自ネットワーク、サポート評価

【問題】

多くの人が他者との良好な関係を志向し、親密さを維持しようと日々努力を重ねている。特に、友人関係は自らの意思で選択できる関係であり、多くの場合、楽しさや安心感、励ましなどを得ることができるため、人々の生活に欠かせない関係となっている。一方で、友人関係におけるトラブルは人々を悩ませ、孤独感や自己否定感を高める原因となったり、深刻な場合には心身の健康を損ねたりすることもある。そのため、人々にとって、友人関係を良好に維持する動機づけは非常に高いと考えられる。特に、青年期は他の年代以上に、友人とのかかわりを希求し、自己の安定や成長に関連づけるとされてきた（岡田，1993）。

それでは、友人と良好な関係を築きたいという動機や期待にはどのようなものがあるだろうか。たとえば、和田（1993）は、同性友人に対する期待として「相互依存」、「協力」、「情報」、「類似」、「自己向上」、「感受性」、「共行動」、「真正さ」、「自己開示」、「尊重」の10領域を検討している。また、榎本（2000）によると、青年期の友人への欲求は友人と互いの個性を尊重する関係を望む「相互尊重欲求」、友人と一緒にいたり、遊んだり友人との親しい関係を望む「親和欲求」、友人との同じ行動や同じ趣味を望む「同調欲求」の3側面があるという。さらに、岡島（1988）は、対人志向性尺度（Hill, 1987）に基づいてその日本語版を作成し、他者と接触することで得られる報酬として、自分が逆境にある時や情緒的につらいときには支えてほしいといった「情緒的指示」、他者との接触によって喜びや満足感を得たいといった「ポジティブな刺激」、自分をよりよく認識するために他者と比較したいといった「社会的比較」、自分を認めて注意を向けたり、共感してほしいといった「注目」の4つの因子を見出している。これらの研究はいずれも、友人と親しくなりたい、一緒にいたいという欲求について、積極的な意味を見出そうとするものである。

しかし近年、対人関係の中で、人は関係の進展や親密さなどの快を求める動機づけと意見の不一致や対立などの不快を回避しようとする動機づけの両方を満たそうとすることが示唆されている。たとえば、杉浦（2000）は拒否不安と親和傾向という2種類の親和動機に注目し、対人的疎外感との関連について検討を行っているが、その中で「どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない」、「友達と対立しないように注意している」といった項目で構成される拒否不安因子と「人とつきあうのが好きだ」、「友人とは本音で話せる関係でいたい」といった項目で構成される親和傾向因子を見出している。また、Elliot, Gable, and Mapes（2006）は、友人関係に代表される社会領域においても接近目標と回避目標が存在すると考え、それらを測定する8項目を作成し、2因子構造を見出している。つまり、社会的相互作用において、相手との関係を深めることを志向する接近的動機づけと相手との関係が悪化することを避けようとする回避的動機づけが存在することを示唆している。これらの知見は、目標として利益を獲得することに動機づけられる促進焦点と、損失を回避することに動機づけられる予防焦点の2つが存在することを示したHiggins（1998）の制御焦点理論とも整合している。

加えて、このような社会的相互作用における動機づけが、関係満足度や対人葛藤方略などに影響することも示唆されている。たとえば、関係満足度に関する研究として、Elisabeth and Brandstätter（2002）は、13ヶ月にわたる縦断的な研究を実施しており、社会的相互作用にお

ける接近・回避的動機づけが関係満足度やパートナーと一緒にいるときに経験する感情に影響することを示唆している。また、Gable (2006) は縦断的な検討を行い、接近的動機や目標が関係全般に対する満足感を高め、孤独感を低下させることを明らかにした。それに対し、回避的動機や目標が孤独感やネガティブな社会的態度、対人的な不安を強めることも明らかにしている。さらに、相馬・山下 (2011) は、接近的動機・回避的動機はそれを充足させる相互作用を通じて関係満足度を高めることを示唆している。一方、対人葛藤方略に関する研究として、吉田・中津川 (2013) は、接近的な関係目標は、対処方略のうち協調と主張に正の影響を与える一方で、回避的な関係目標は、服従および回避の選択を促進することを示唆している。これらの研究結果をふまえるならば、社会的相互作用における動機づけが関係の進展や維持に与える影響は大きいといえるだろう。

しかし、これらの研究は社会的動機づけに基づいた相互作用が行なわれる関係にのみ焦点を当てており、ある社会的動機づけに基づいた2者関係のあり方が個人をとりまく対人ネットワークに及ぼす影響についてはあまり検討されてこなかった。個人がある関係を開始し、維持している時、その他の人々との関係を失うという仮定は困難であり、多くの場合はそれまで築いてきた関係もまた維持され、開始した関係を出発点として、新たな関係が生じることが一般的であるように思われる。そのため、2者関係における関係の質や社会的動機づけに基づいた相互作用のあり方が対人ネットワークの構造や対人ネットワークに対する様々な評価に影響する過程や、それとは逆の影響過程について検討することは重要であり、対人ネットワークに着目した検討が必要であると考えられる。

対人ネットワークの構造については様々な測定方法があるが、先行研究においては、自分とパートナーの共通ネットワークと独自ネットワークの機能に関する示唆が得られている。共通ネットワークとは、自分と親密な関係にある他者の両方が相互作用している人々で構成されるものである。一方、独自ネットワークについては、自分と親密な関係にある他者が共有していない、自分だけが知っている人々で構成されるものである。これらの対人ネットワークの構造は二者関係の相互作用に様々な影響を与えることが示唆されている。

たとえば、Widmer, Kellerhals, and Levy (2004) は6つの夫婦関係におけるネットワークと夫婦関係の葛藤および夫婦関係の質との関連について検討を行っている。夫婦関係におけるネットワークのタイプは、夫婦の両方が友達や身内とのつながりが薄いタイプ、身内とのつながりが薄い一方で友人とのつながりだけが存在するタイプ、男性の方が女性よりも友人や身内とのつながりが多いタイプ、女性の方が男性よりも友人や身内とのつながりが多いタイプ、夫婦の両方と友人や身内がつながっているタイプ、夫婦の両方と友人や身内がつながっているが、特に女性が身内にコントロールされている感情が強いタイプの6つであった。夫婦の両方と友人や身内がつながっているタイプだけが他のタイプと比較して、夫婦関係の葛藤を低減させ、夫婦関係の質を向上させることを示唆している。この研究は夫婦を対象とした研究であるため、直接援用することは難しい側面もあるが、少なくともパートナーや友人との共通ネットワークが関係におけるトラブルを回避させ、関係の満足度を高める効果をもつ可能性を示している。

一方、独自ネットワークは、親密な関係で生じた問題を悪化させないための効果を持つことが示唆されている。たとえば、親密な関係における協調的・非協調的志向性に着目した研究に

においては、恋人・夫婦関係に対して特別観を強くもつほど協調的な行動をとりやすくなる一方で、非協調的な行動をとりづらくなることが示唆されている（相馬・浦，2009）。協調的な行動とは、相手が自分に何かよいことをしてくれた場合には謝意を示すといった行動であり、非協調的な行動とは、相手が自分に何か嫌なことをしてきた場合にきっちりと反論や批判を返すようにする行動を指す。基本的に親密な関係においては、非協調的な行動をとりにくくなるが、恋人・夫婦関係において特別観をもっている、外部の独自ネットワークからサポートを利用できる状況では非協調的志向性が低下しないことが示唆されている（相馬・深澤・浦，2004）。

これらの示唆では、個人の対人ネットワークの構造がどのようなプロセスで2者関係の質や相互作用のあり方に影響するかについては必ずしも詳らかにはなっているわけではないが、多大な影響を与えている可能性は高い。また一方で、人はこのような対人ネットワークの機能に対する期待を持っており、社会的相互作用における動機づけ（接近/回避）に沿った形で親密な関係が維持されるように、対人ネットワークの構造を変化させる可能性がある。

山下・相馬（2011）は大学生を対象に縦断的調査を実施し、社会的相互作用における接近・回避的動機づけが共通ネットワークの変化に及ぼす影響を検討している。その結果、最も親しくなりたい相手に対して回避的動機づけを持っていた男性は共通ネットワークを増やすが、同様に回避的動機づけを持っていた女性は共通ネットワークを減らすことを示唆している。また、接近的動機づけについても検討を行なっているが、接近的動機づけは共通ネットワークの変化に影響を与えていなかった。この結果をふまえるならば、共通ネットワークの変化は、関係に生じる問題を極力減らすことや回避的動機が高い関係の不快さを軽減することを目的とした、親密な関係を維持するための対処の1つであることが予測される。そして、山下・相馬（2011）の結果は、回避動機が高い関係における不快さに対処する方法にはジェンダー差が存在する可能性を示唆していると言えよう。

確かに、自分と相手との2者関係の中に、友人の友人という第3者を含めたネットワークを構築していくことに対する抵抗感は男性と女性で異なっていることがこれまでに示されている。Benson, Apostoleris, and Parnass（1997）は、日常的な場面における2者関係と集団における相互作用の性差と年齢差について検討を行っているが、同じ時間を2者関係の相互作用に費やした場合でも、男児は多くの異なるパートナーと相互作用をするが、女児は数少ないパートナーと長い時間相互作用をする傾向が観察された。また、Feshbach and Sones（1971）は、間接的な攻撃性に関する性差の検討を行う中で、女子のペアは男子のペアより、自分たちのペアに参入する第3者（新しい友人）に対する評価が好ましくなく、問題解決課題に取り組んでいる最中も、第3者に対する友好的な反応が少ないことを明らかにしている。このような社会行動におけるジェンダー差に関する先行研究は一貫して、男性と比較して女性の2者関係は閉じており、新しい友人を受け入れることが容易ではないことを示唆している。一方、女性と比較して男性の2者関係は開かれており、新しい友人を受け入れることが容易であることを示唆している。

これらの点を踏まえて改めて山下・相馬（2011）の結果について考察するならば、男性の結果は、回避的動機づけが高い関係において対立や争いを回避するため、相手と自分をサポートしてくれる共通の友人を増やす他者志向的解決方略を用いた結果であると考えられる。一方、

女性の結果は、回避的動機が高い関係の不快さを相手とは別のネットワークにおける相互作用で軽減するという自己志向的解決方略を用いた結果であると考えられる。

このような対人ネットワークにおける相互作用のジェンダー差をふまえるならば、最も親しい相手とのトラブル時に対人ネットワークから得られるサポートに対する期待も男性と女性では異なることが予測される。ある個人の対人ネットワーク（友人や家族、知人）が、特定の2者関係でのトラブル時にサポートに機能すると思うこともあればそう思えないこともあるが、少なくとも女性は回避的動機づけが高い関係において、相手との共通ネットワークから得られるサポートより、相手と独立した独自ネットワークから得られるサポートを高く評価すると予測される。一方男性は、回避的動機づけが高い関係において、相手と独立した独自ネットワークから得られるサポートより、相手との共通ネットワークから得られるサポートを高く評価すると予測される。

そこで、本研究では最も親しい相手と対立や争いを回避したいという動機づけがある状況で、自分と相手の共通ネットワークと相手とは重なりのない独自ネットワークから得られるサポートに対する評価がどのように異なるのか、ジェンダー差に着目した検討を行なう。予測として、男性は最も親しい相手と共通の友人が多い対人ネットワークをトラブル時にサポートタイプだと評価するが、女性はしないだろう（予測1）。女性は独自の友人が多い対人ネットワークをサポートタイプであると評価するが、男性はしないだろう（予測2）。

【方 法】

調査協力者 大学生165名（男性58名、女性107名）が調査に協力した。平均年齢18.97歳（SD=1.44）であった。調査全体としては、縦断的な調査（time 1、time 2）を実施している。今回は、両調査に参加していた148名（男性51名、女性97名）を対象に、time 2で得られた回答について分析した結果を報告する。

調査時期 調査は大学の講義時間に協力を依頼し、2012年7月（time 1）と2013年1月（time 2）に実施された。

質問紙構成 質問紙は表紙と以下に示す尺度によって構成された。表紙には、研究の目的と回答にあたっての注意を記載した。調査の結果は、研究目的にのみ使用され、個人が特定される形式で研究結果が公表されないことを明記した。また、以下の尺度に回答する前に、学内で最も仲のよい友人1名（Aさん）のイニシャルを挙げてもらった。2時点で同じ相手について回答した者のデータを分析対象としている。

1) 相互作用における接近的・回避的動機づけに関する尺度

Elliot et al. (2006) の作成した社会的動機づけ尺度の翻訳版（長谷川・相馬, 2011）を用いた。最も親しい友人をAさんとして思い浮かべてもらったうえで、接近的動機として「私は、相手とたくさんの面白いことや有意義な経験を共有しようと心がけている」「私は相手との関係が深まるように心がけている」などの4項目（ $\alpha = .88$ ）、回避的動機として「私は、相手との間で、

意見の不一致や対立を避けようとして心がけている」、「私は相手との関係を悪くするような状況を避けるように心がけている」などの4項目 ($a=.80$) を5件法で尋ねた。

2) 対人ネットワークに関する測度

①対人ネットワークサイズ

大学内でAさん以外に「あなたとよく話をする人」を思い浮かべ、思いつく限り、イニシャルを挙げるように教示した。その人数を対人ネットワークサイズとした。

②共通ネットワークサイズ

①で挙げられた人物のうち、「Aさん（最も親しい友人）とも知り合いである人」に○印をつけるよう教示した。○がつけられた人数を共通ネットワークサイズとした。

③独自ネットワークサイズ

①から②を減算し、Aさん（最も親しい友人）とは知り合いではない独自ネットワークサイズを算出した。

3) トラブル時に得られる対人ネットワークからのサポートに対する評価

Aさん（最も親しい友人）とトラブルになった場合、大学内でAさん以外によく話をする人として挙げた人物に対して、「上記で挙げた人物なら助けてくれるだろう」、「上記で挙げた人物なら、私の味方になってくれるはずだ」、「上記で挙げた人物にAさんとのトラブルの大変さを理解してほしい」という気持ちを抱く可能性について、「1 = 全く思わない」～「5 = まちがいなく思う」までの5件法で尋ねた ($a=.68$)。

【結 果】

1) 分析に用いる指標の記述統計と各変数間の相関係数

本研究で使用する社会的相互作用における接近的・回避的動機づけと対人ネットワークに関する測度、トラブル時に得られる対人ネットワークからのサポートに対する評価の記述統計と各変数間の相関係数を算出した (Table 1)。なお、本研究では分析ツールとして、心理統計分析用フリープログラムHAD (清水・村山・大坊, 2006) を用いた。

Table 1 分析に用いた変数の記述統計と0次相関

	n	平均値	SD	1	2	3	4
1: 接近動機	122	14.74	3.18				
2: 回避動機	120	12.98	3.22	.577 **			
3: 共通ネットワークSize	120	3.83	3.79	.148	-.052		
4: 独自ネットワークSize	120	2.53	3.22	.119	-.002	-.005	
5: SNポジティブ評価	120	3.12	0.71	.172 †	.195 *	.195 *	.041

まず、接近的動機づけと回避的動機づけについては中程度の正の相関が認められた。杉浦(2000)が指摘しているように、親和動機には拒否不安と親和傾向の2つの方向性があり、最も親しい友人に対する社会的相互作用の動機づけとして、この関連は妥当であると考えられる。ただし、回避的動機づけの影響力に着目した今回の分析においては、接近的動機づけを統制したうえで検討を行なう。

次に、社会的相互作用における動機づけのうち、接近的動機づけと対人ネットワークからのサポートに対するポジティブな評価とは弱い正の相関が認められる傾向にあり、回避的動機づけとは弱い正の相関が認められた。つまり、社会的相互作用における動機づけは、対人ネットワークから得られるサポートに対する肯定的な評価と一定の関連があることが示された。

最後に、共通ネットワークサイズと対人ネットワークからのサポートに対するポジティブな評価には弱い正の相関が認められた。最も親しい友人と共通の友人が多くなればなるほど、その友人たちが最も親しい友人とのトラブルに際し、サポーターに機能すると評価していた。

2) 社会的相互作用における動機づけ、対人ネットワークの構造、対人ネットワークから得られるサポートに対する評価に関するジェンダー差の検討

本研究で用いる指標についてジェンダー差が認められるか検討するために、社会的相互作用における動機づけ（接近/回避）、対人ネットワークの構造（共通/独自）、対人ネットワークから得られるサポートに対する評価を従属変数としてt検定を実施した。その結果、共通ネットワークのみにジェンダー差が認められ、男性 ($M=2.29$) より女性 ($M=4.47$) の方が共通ネットワークを有していることが明らかとなった ($t(93) = 2.96, p < .01$)。

3) トラブル時に得られる対人ネットワークからのサポートに対するポジティブな評価

本研究で立てた2つの予測について検討するために、対人ネットワークからのサポートに対するポジティブな評価を基準変数として、接近的動機づけを統制のうえ、性別（ダミー変数を使用：男性 = 1、女性 = 2）、対人ネットワークサイズ（共通と独自）、回避的動機づけをstep 1での独立変数、2変数の交互作用項をstep 2の独立変数に投入した階層的重回帰分析を行った。

その結果、共通ネットワークサイズ ($B = .08, p < .01$)、共通ネットワークサイズ×性別の交互作用項 ($B = -.13, p < .05$)、回避的動機×性別の交互作用項 ($B = .11, p < .05$) が対人ネットワークからのサポートに対するポジティブな評価を有意に説明した ($R^2 = .21, F(10,81) = 2.19, p < .05$)。つまり、共通ネットワークサイズが大きくなる程、Aさんとのトラブル時にその友人たちが助けてくれると評価していた。また、男性は共通ネットワークが多くなるほど、Aさんとのトラブル時にその友人たちが助けてくれると評価したが、女性には同様の傾向は認められなかった (Figure 1)。さらに、男性は最も親しい友人との間に回避的な動機が存在しない場合に対人ネットワークが助けになると知覚した (Figure 2)。

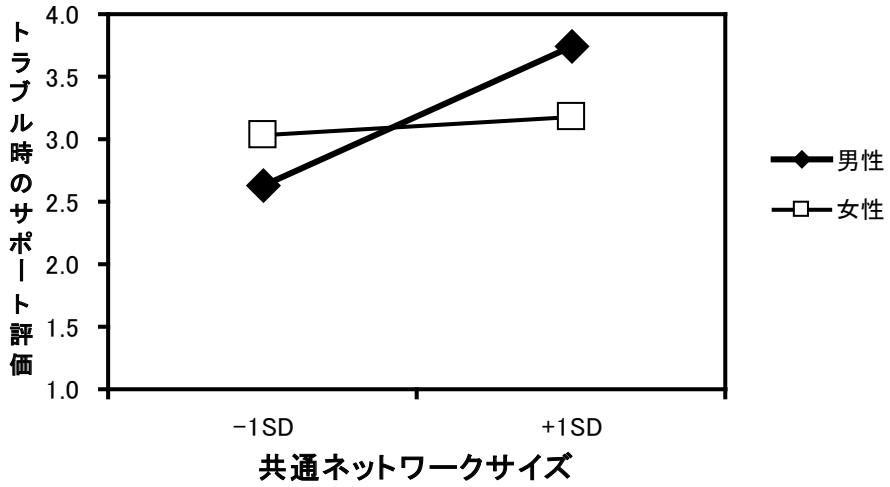


Figure 1 共通ネットワークサイズが対人ネットワークからのサポートに対するポジティブな評価に及ぼす影響

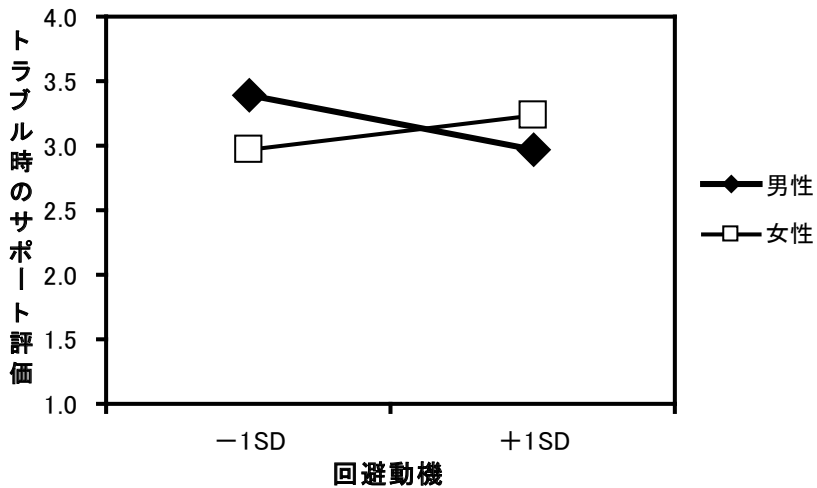


Figure 2 回避的動機づけが対人ネットワークからのサポートに対するポジティブな評価に及ぼす影響

【考 察】

本研究の目的は、最も親しい相手と対立や争いを回避したいという動機づけがある状況で、自分と相手の共通ネットワークと相手とは重ならない独自ネットワークから得られるサポートに対する評価がどのように異なるのか、ジェンダー差に着目した検討を行なうことであった。その結果、男性は最も親しい相手と共通の友人が多い対人ネットワークをトラブル時にサ

ポーティブだと評価するが、女性はしないだろうという予測1については、概ね支持された。男性では、対人ネットワークにおける相手と共通の友人の多さが、その相手とのトラブル時に対人ネットワークの友人たちが助けになるという対人ネットワークから得られるサポート評価に影響していた。しかし、女性では共通の友人の多さによって対人ネットワークから得られるサポート評価が影響を受けることがほとんどなかった。また、女性は独自の友人が多い対人ネットワークをサポートであると評価するが、男性はしないだろうという予測2については支持されなかった。

これらの結果をふまえるならば、少なくとも男性には、最も親しい相手とのトラブル時、独自ネットワークより共通ネットワークの有効であると意識されている可能性がある。友人たちのネットワークの中で、親密な関係におけるトラブルを回避し、もし問題が生じた場合にも対人ネットワークのサポートを活用しながら、その問題に対処したいという期待を持っていると考えられる。また、男性においては、回避的動機が低い場合により対人ネットワークをサポートであると評価したことから、男性は最も親しい相手とのトラブルを回避する必要性をあまり感じていない場合にこそ、ネットワーク全般のもつトラブル深刻化の予防機能を高く評価しているといえよう。

一方、実際にトラブルを回避する必要性を感じている場合には、最も親しい相手以外の友人達がトラブル時にサポートしてくれるとは評価しなくなると考えられる。この理由として、最も親しい相手とのトラブルを回避したいという動機づけが高まるような状況では、自らが行なう最も親しい相手とのトラブルを回避するための相互作用が成功するか否かが重要であり、また対人ネットワークから得られるサポート機能についても2人の関係を良好に保つうえで適切であるか否かなど、より現実的な基準で評価することになる。そのため、友人達が「助けてくれる」「味方になってくれる」といった感情的な拠り所としての意味合いが強い「トラブル時に得られる対人ネットワークからのサポート評価」が低下してしまった可能性がある。

次に、女性の結果について考察する。Benenson and Heath (2006) は児童を対象に1対1の2者関係もしくは1つの集団において実際に課題を完成させる実験を行なっているが、男児は集団での相互作用より1対1の相互作用を避ける傾向がある。一方、女児は1対1の相互作用より集団での相互作用を避ける傾向を見出している。また、Seeley, Gardner, Pennington, and Gabriel (2003) によると、男性は集団に対する魅力を報告したが、女性は集団内に個人との関係が存在する場合にのみ集団に対する魅力を報告することが示唆されている。このような先行研究をふまえるならば、男性と女性の対人ネットワークにいるメンバーとの相互作用のあり方や対人ネットワークに対する期待が異なる可能性が高い。本研究においては、共通ネットワークは男性より女性の方が大きかったにも関わらず、その大きさによって女性が対人ネットワークから得られるサポートの評価を変化させることはなかった。また、独自ネットワークにおいても予測した結果を得ることはできなかった。女性は対人ネットワークを1つの大きなグループというより、1対1の関係の集合体と捉えており、その1つ1つの関係に配慮するという方法で対人的なトラブルを予防している可能性がある。したがって、トラブルが起こった際にも基本的には相手と1対1で向き合い、解決することを志向する可能性がある。

最後に、本研究の限界と今後の展望について述べる。本研究においては、対人ネットワーク

の構造（共通/独自）に着目したが、その対人ネットワークと自分とのつながりを人々がどのように捉えているかという点については考慮していなかった。また、対人ネットワーク内の人々同士の関係の強さなどによっても、トラブル時に対人ネットワークから得られるサポートに対する評価が異なることが予想される。これらの対人ネットワークの構造に関する測度を精緻化し、社会的相互作用における動機づけに沿って維持されている2者関係に對人ネットワークの構造のどのような側面が影響を及ぼしているのかをより詳細に検討する必要がある。

また、本研究においては、対人ネットワークから得られるサポート評価について、ポジティブな評価のみの検討を行なった。対人ネットワークからの影響は必ずしもポジティブなものだけではなく、対人ネットワークからの干渉や配慮のわずらわしさなどネガティブな側面も存在する。特に、トラブル時のなぐさめや助言を求める行動は、トラブル相手との関係悪化を招いたり、対人ネットワークの人々からの印象低下を招いたりする恐れもある。このような対人ネットワークから得られるサポートに対する抵抗感やネガティブな評価についても検討を行なう必要がある。

さらに、本研究で得られた結果について、トラブル回避のために対人ネットワークからのサポートを期待し、対人ネットワークからのサポートが活用される可能性について述べた。山下・相馬（2011）は、縦断的調査によって、最も親しくなりたい相手に対して回避的動機づけを持っていた男性は共通ネットワークを増やすが、同様に回避的動機づけを持っていた女性は共通ネットワークを減らすという結果を示しており、対人ネットワークを最も親しくなりたい相手との関係に対する動機づけに応じて変化させることが示唆されている。このような先行研究より、最も親しい相手とトラブルを起こしたくないと動機づけられている場合、トラブルを起こさないための相互作用を続け、その努力が効果的に機能している場合には、対人ネットワークを活用する必要はないため、対人ネットワークから得られるサポートへの期待も低く、対人ネットワーク構造にも変化がないと予測される。しかし、トラブルを起こさないための相互作用を続けても、自分の望む効果が得られない場合、対人ネットワークから得られるサポートへの期待も高くなり、対人ネットワークの構造にも変化が生じると予測される。実際、相馬・山下（2011）は、接近的動機・回避的動機はそれを充足させる相互作用を通じて関係満足度を高めることを示唆している。今回の検討では、回避的動機づけと現在の対人ネットワーク構造の違いが、トラブル時の対人ネットワークからのサポート期待に影響することを明らかにしたが、継続されている相互作用が対人ネットワークからのサポート期待や対人ネットワークの構造の変化に及ぼす影響を縦断的研究によって検討する必要がある。

【引用文献】

- Benenson, J. F., Apostoleris, N. H., & Parnass, J. (1997). Age and sex differences in dyadic and group interaction. *Developmental Psychology*, 33, 538-543.
- Benenson, J. F., & Heath, A. (2006). Boys withdraw from one - on - one interactions, whereas girls withdraw more in groups. *Developmental Psychology*, 42, 272-282.
- Elisabeth, F. & Brandst?tter, V. (2002). Approach versus avoidance : Different types of commitment in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 208-221.

- Elliot, A. J., Gable, S. L., & Mapes, R. R. (2006). Approach and avoidance motivation in the social domain. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 378-391.
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関係 教育心理学研究, 48, 444-453.
- Feshbach, N., & Sones, G. (1971). Sex differences in adolescent reactions toward newcomers. *Developmental Psychology*, 4, 381-386.
- Gable, S. L. (2006). Approach and avoidance social motives and goals. *Journal of Personality*, 74, 175-222.
- 長谷川孝治・相馬敏彦 (2011). 安心さがしと社会的動機づけが他者からの拒絶に及ぼす影響 第58回日本グループ・ダイナミクス学会大会発表論文集, 58-59.
- Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, 30, 1-46.
- 岡島京子 (1988). 親和動機測定尺度の作成 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 864-865.
- 岡田努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- Seeley, E., Gardner, W., Pennington, G. L., & Gabriel, S. (2003). Circle of friends or members of a group?: Sex-differences in relational and collective attachment to groups. *Group Processes and Intergroup Relations*, 6, 251-263.
- 清水裕士・村山綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用 電子情報通信学会技術研究報告, 106 (146), 1-6.
- 相馬敏彦・浦光博 (2009). 親密な関係における特別観が当事者たちの協調的・非協調的志向性に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 49, 1-16.
- 相馬敏彦・深澤優子・浦光博 (2004). 二人の味方は私の味方?—親密な関係での協調的・非協調的志向性に及ぼす特別観と関係外部からのサポートおよびその対象におけるパートナーとの重複の影響— 第45回日本社会心理学会大会発表論文集, 204-205.
- 杉浦健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達の変化— 教育心理学研, 48, 352-360.
- 山下倫実・相馬敏彦 (2011). 社会的相互作用における接近・回避的動機づけが共通ネットワークの変化に及ぼす影響 第52回日本社会心理学会大会発表論文集, 167.
- 吉田琢哉・中津川智美 (2013). 対人葛藤対処方略の選択に対する関係目標の影響—接近—回避の軸に基づく検討— 実験社会心理学研究, 53, 30-37.
- 和田実 (1993). 同性友人関係—その性および性別タイプによる差異— 社会心理学研究, 8, 67-75.
- Widmer E. D., Kellerhals J., & Levy R. (2004). Types of conjugal networks, conjugal conflict and conjugal quality. *European Sociological Review*, 20, 1, 63-77.